

〔日本家族看護学会 国際交流委員会活動報告〕

第11回国際家族看護学会議の見聞録および 国際交流委員会主催ツアーの活動報告

法橋 尚宏¹⁾ 平谷 優子²⁾ 岡 澄子³⁾ 松本 啓子⁴⁾
古澤亜矢子⁵⁾ 浅野みどり⁶⁾ 本田 順子²⁾

はじめに

11th International Family Nursing Conference (11th IFNC: 第11回国際家族看護学会議)は, Kathleen A. Knaf博士が議長, Catherine A. Chesla博士が共同議長で, アメリカ合衆国のミネソタ州ミネアポリスにあるホテルHyatt Regency Minneapolisにて, 2013年6月19~22日の会期で開催された. International Family Nursing Association (IFNA: 国際家族看護学会)が2009年6月に発会した後, IFNAが主催した最初の国際会議となった. 今回の参加者は, 27ヶ国から433名であった(表1). 日本からの参加者は63名で, プレカンファレンス, 講演, 口演, ポスター発表などで積極的に発表を行った.

日本家族看護学会国際交流委員会では, プロモーション活動としてブースを出展し(図1), 英語版リーフレット, 学術集会の情報, 学会誌の題目情報, Call for papersと英語版投稿規定, 論文別刷り(国際交流委員会の過去の活動), 日本家族看護学会のオリジナルクリアーホルダーなどを配布した(それぞれ約300部配布). また, 国際交流委員会が日本家族看護学会会員のために企画したツアー(近畿日本ツーリストがハンドリング)には27名の申込みがあり, 複数の日程に分散して渡米・帰国した.

表1. 国・地域別の参加者数

国・地域	参加者数(名)
Australia	1
Austria	2
Brazil	29
Canada	28
China	1
Croatia	1
Denmark	7
Egypt	1
Finland	5
Germany	1
Iceland	11
India	1
Ireland	3
Italy	2
Japan	63
New Zealand	5
Norway	1
Portugal	6
Republic of China (Taiwan)	10
Rwanda	1
Saudi Arabia	1
Spain	1
Sweden	9
Switzerland	9
Thailand	22
United Kingdom	7
USA	205
合計	433

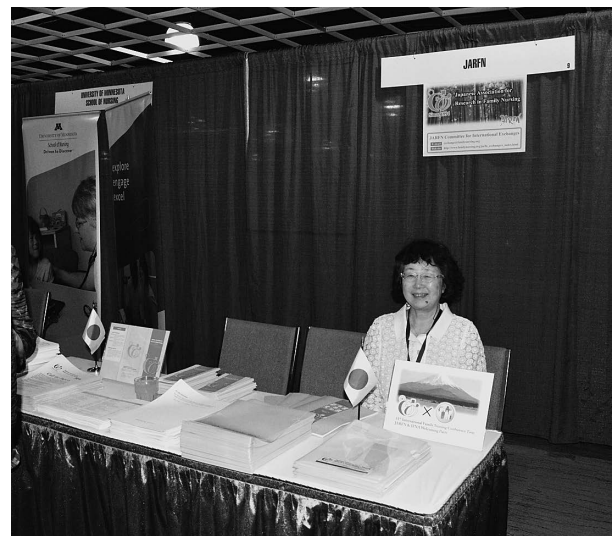


図1. 日本家族看護学会の出展ブースの様子

1) 日本家族看護学会国際交流委員会 委員長
2) 日本家族看護学会国際交流委員会 委員
3) 神奈川県立保健福祉大学
4) 川崎医療福祉大学
5) 日本赤十字豊田看護大学
6) 名古屋大学大学院医学系研究科

表2. 主要なプログラム

2013年6月19日	2013年6月20日
有料プレカンファレンスワークショップ (6セッション) 開会式 (フラッグパレード) レセプション	IFNA committee meeting Round-table discussion オープニング・アナウンスメント 基調講演 口演 (24セッション) ポスターセッション (終日)
2013年6月21日	2013年6月22日
IFNA committee meeting オープニング・アナウンスメント 基調講演 Panel Asian network meeting 口演 (16セッション) ポスターセッション (終日) ガラディナー	口演 (6セッション) IFNA business meeting 閉会基調講演 閉会式 Invitation to the 12 th IFNC in Brazil 2015

本稿では、ツアー利用者の共同執筆（オーサーシップは執筆順）により、会議見聞録とツアーの活動を報告する。なお、会議の全日程は表2のとおりである。

1. 家族看護学のエキスパートとツアー利用者との懇親晚餐会（6月18日）

ツアーの空き時間を有効活用するために、家族看護学のエキスパート8名（Feetham博士、Knafl博士、Chesla博士、Eggenberger博士、Denham博士、Riper博士、Bell博士、Robinson博士）を招待し、6月18日に日本を出発したパーティ24名（27名中3名は別スケジュール）との懇親晚餐会をツアー初日に行った（図2）。現地の日本人ガイドも参加し、英語が苦手な参加者でも安心して楽しむ、参加者間の親睦が深まるような内容を国際交流委員会が企画した。

法橋尚宏国際交流委員長のオープニング・アナウンスメントの後、IFNA 理事長のRiper博士が乾杯の音頭をとり、懇親晚餐会がスタートした。ミネアポリスに到着して最初の食事は、しっかりとした味付けのクラムチャウダー、大盛りのマッシュポテト、巨大なステーキ（約255g）であり、アメリカらしい雰囲気味わった。想像を上回る大きさのデ



図2. ツアー利用者のための懇親晚餐会（6月18日）の様子

ザートを堪能する前に、本会の目玉となるビンゴゲームを全員で楽しんだ。ビンゴゲームはアメリカでも人気があるようで、景品として用意した日本のお土産品である“侍”，“忍者”，“愛”などの漢字が記載されたタンブラー，計算機，傘，風呂敷などをめぐり、大いに盛り上がった。全員が景品を手にするまでに少々時間がかかったが、記念に残るものを持ち帰ることができたのではないかと期待する。このような先生方とともにビンゴゲームを行う機会は滅多にあるとは思えず、非常に良い思い出となった。さらに、著名な先生方に対する親しみが増し、翌日から始まる会議を楽しみに感じられた。ツアーには単独での申込者が複数名いたが、懇親晚餐会が仲間作りの契機になった。

II. プレカンファレンス (6月19日)

合計6つの有料プレカンファレンスが開催され、いずれも大盛況であった。午前は「Translating family research to practice and policy: Examples from practice environments in three countries」「Unpacking the Illness Beliefs Model: What do we know from practice-based evidence about healing families」「Facilitating family caregiving: Theory-driven intervention development and evaluation」の3つのワークショップ、午後は「Using adaptive leadership framework and trajectory science methods for research in family health」「Integrating spirituality into family nursing practice: “Do I need to? Do I want to? What clinical skills would I need?”」「Teaching family-focused nursing care using simulation」の3つのワークショップがあった。Feetham博士、法橋尚宏博士、Bell博士、Rogers博士、Docherty博士、Wright博士、Christian博士など、世界の家族看護学の第一人者によるワークショップであり、参加者は活発な意見交換を行った。事例を織り交ぜながら意見交換をするワークショップもあり、実践と研究をどのように結びつけていくかを考える貴重な機会となり、今後の研究への示唆が得られた。

夜のオープニング・アナウンスメントでは、議長のKnafel博士の講話の後、参会者の出身国の紹介があった。日本は、国旗（日の丸）、富士山などの映像と共に紹介を受けた（図3）。さまざまな国の参加者から多くの拍手を受け、非常に感激した開会式



図3. 開会式 (6月19日) の様子

となった。会場は、国籍の違いを忘れてしまうほどの自由な雰囲気の中、かけ声や手を振り合い、良い雰囲気であった。日本の参会者はアメリカ合衆国に次いで2番目に多く、家族看護学に高い関心をもつ国であると諸外国に印象づけることができたのではないかと思われた。その後のレセプションでは、ワイングラス片手に第11回国際家族看護学会議の開催を祝した。

III. ツアー利用者向けの有料オプションツアー (6月19日)

ツアー利用者のうち有料オプションツアーに参加したのは、当日の飛び入り参加の1名を加えた合計11名であった。逸る気持ちとともにバスに乗り込み、市街地を抜けると1時間もかからないうちにミシシッピ川のクルーズ船に到着した。大自然の景観や峡谷の美しさに見とれながら、全員で記念写真を撮った。天候にも恵まれ、頬を撫でる風も気持ち良く、自然の美しさと美味しいランチバイキングを満喫した。

下船してからは、ミネソタで一番最初に開拓者が入植した場所であるStillwaterの散策を楽しんだ。ダウンタウンで印象的であったのは、老舗ホテルのLowell Innである。宿泊や食事というわけにはいかなかったが、ロビーやレストランを見学し、調度品や壁の飾りなどを眺めることで、1848年の創業当時にタイムスリップした気分になった。街中の散策では、昔ながらの景観をそのまま残した開拓当時の古い家屋や倉庫を改装したレストラン、アンティークショップなどが軒を連ね、楽しいひとときを過ごした。ツアーガイドは、現地在住の日本人であり安心感が倍増した。その解説は初心者にもわかりやすく、大満足の1日となった。

IV. 会議第1日目 (6月20日)

ミネソタ大学のBoss博士が、「Ambiguous loss:

Resiliency, not closure (曖昧な喪失：終わりになきレジリエンス)」というテーマで基調講演を行った。言語の壁があり聞き取れない部分が多かったものの、講演の内容はパソコンやモバイルデバイス(iPad, iPhoneなど)からPowerPointのファイル(英語版と日本語版の両方)をリアルタイムで見ることができ、誰でも理解しやすいように工夫されていた。講演内容で印象的であったのは、病気や災害で対象を喪失した場合にトラウマなどを引き起こすことがあるが、喪失(感)をなくすのではなく、喪失(感)とともに生きていくことが大切で、その人のレジリエンスを保つような支援が重要であることを強調されていた点である。また、われわれのような専門職者についても言及しており、喪失をどのように考えるのか、喪失の意味を見つけていくことが大切であり、仕事においては疲れ過ぎないようにすること、仕事量を減らすこと、適度に休みをとることが重要であると述べていた。

次に、口演が各部屋に分かれて行われた。日本の学会の学術集会と同様に、30～50名程収容できる部屋で、1演題につき発表と質疑応答を含め約20分で進行した。テーマは、慢性期における子ども(成人を含む)をもつ家族の体験、家族機能、ケアについてなどで、日本でも課題となるテーマであったため親近感を覚えた。特にアメリカらしいテーマとしては、トラウマに関するもの、戦地における家族の経験などで、日本では珍しいテーマが発表された。発表内容については、研究方法は質的研究が多い印象を受け、結果においては家族の体験の語りを多く引用し、考察では研究者の意見を強く主張していた。発表に対する質問も多く、発表内容に大きく頷き、わかりやすい反応を示しながら聞いていた姿が印象的であった。

その後、ポスター発表に参加した。共通のテーマについて研究している実践家より質問を受けるなど、ポスターを通して同じテーマで研究している者同士は、国は違っても看護の視点が共通であると感じた。ポスターは、用紙(紙、布など)、サイズな

どがさまざまであり、個性的に作成していた。国際会議では、英語が得意でない者にとっては、より英語を聞き取ることの難しさを感じる機会となるが、お互いに頷きながら共感した場面、首を振りながら違うことを強調した場面、笑顔で笑いあった場面などに遭遇し、国の違いを忘れるような経験もできた。今後も家族看護に携わるIFNA会員と情報交換をしていきたいと強く感じた。

V. 会議第2日目(6月21日)

基調講演は、著書『ベナー看護論：初心者から達人へ』などで著名なBenner博士であった(図4)。Benner博士は、カーネギー財団の上席研究員であり、カリフォルニア大学サンフランシスコ校看護学部の名誉教授である。講演のタイトルは「Implications for family nursing: The National Carnegie Study—Educating nurses, a call for radical transformation (家族看護学への影響：全国カーネギー調査—看護師を教育し、抜本的な改革を呼びかける)」であり、看護に特化した教育についての講演であった。家族看護に特化した教育については、家族プロセスと病気の進行という2方向の関係への理解、家族プロセスのリスクと保護的な要因の特定、家族を単位として対応することによる相関的なスキルの向上などを列挙し、教育の例として“家族の健



図4. Benner博士による基調講演(6月21日)の様子

康に関する物語を引き出して解釈する練習”を挙げていることが印象的であった。

引き続き、Martin博士（スコットランド）、Figueiredo博士（ポルトガル）、Angelo博士（ブラジル）、小林奈美博士（日本）、Bell博士（カナダ）より、自国の看護教育制度・大学院教育の歴史と現状、家族看護学の現状について報告があった。日本のスピーカーが、当初の予定から変更になっており、日本の現状や課題については、小林奈美博士が堪能な英語で見事にプレゼンテーションをした。恐らく急遽のピンチヒッターであり、時間がないなかでのプレゼンテーションの準備は大変であったと拝察される。しかし、それを微塵も感じさせない発表・質疑応答で、非常に頼もしく、英語の苦手な筆者には印象深かった。なお、日本は日本家族看護学会という立派な組織を諸外国に先んじて組織している点で注目されていることを幾度か感じた。

午後は、「Adults with chronic illness/self-care and caregiving」「Children with chronic illness/caregiving」「Child rearing & child bearing families/promotion-prevention」「Community/interdisciplinary family health practice」などのテーマ別に、16セッションの口演が行われた。1セッションあたり3～4演題の口演であるが、小児に関する演題が多い点は、日本家族看護学会の学術集会の実態と共通していた。父親への介入アプローチの研究などが非常に興味深かったが、英語のハードルさえクリアできれば、日本の看護実践や研究も決して引けを取らないとも感じた。

また、Chiang博士と法橋尚宏博士をモデレーターとして、Asian network meetingが開催された。今後、アジアにおける家族看護学関係者のネットワーク構築が進むことが期待される。

夜は、お待ちかねのミシシッピ川でのガラディナーであった。会議場から大型バス3台でダウンタウンを抜けた先のミシシッピ川の乗船場へ到着した。2つの船体が連結しており、はじめは前部の船に乗り込んでデキシーランド・ジャズの生演奏を聴

きながらシャンパンで乾杯し、気分が盛り上がった。その後、ディナーテーブルの準備が整った連結後部の船に移動してディナータイムとなった。ガラディナー中は窓外が見え難いほど激しい雨であったが、下船する頃にはすっかり雨も上がり、濡れることなくバスに乗り込んだ。

VI. 会議第3日目（6月22日）

朝8時より6部屋で口演が行われた後、メイン会場にてIFNAのBusiness Meeting（会員総会）が開かれた。Business Meetingでは、IFNAの活動や各委員会の活動報告が行われ、家族看護学の研究、実践、教育の質の向上と会員間のネットワーク作りについて活動の現状を知ることができた。

Hinds博士による閉会基調講演は、「“The good parent” of seriously ill children: A Family construct（重い病の子どもの“よい親”：家族の構成）」というテーマであった。冒頭では、007（ダブル・オー・セブン）のテーマ曲が流れる中、スライドにはスパイ映画でおなじみのJames Bondらの写真が現れ、Hinds博士はサングラスをしてスパイになりきったところで、「スパイと看護学研究者に共通するのは、“Asking Why（なぜと問うこと）”である」と述べていたことが印象に残った。このように、会議に参加することで、研究内容もさることながら、国内外の研究者のプレゼンテーションスキルを学ぶ機会にもなった。

閉会式では、Kalpulli Yaocenoxtliというグループによるアズテック族（メキシコ原住民族）のダンスとドラムの大迫力のパフォーマンスがあり、さらに、次回の開催地であるブラジル・サンパウロの紹介が行われた（2015年開催予定）。

なお、IFNAの役員選挙の結果報告があった。この日をもって、理事長は、Riper博士からChesla博士にバトンタッチした（2015年まで）。また、次期理事長はRobinson博士であり、理事はAngelo博士、Garwick博士、法橋尚宏博士、Mahrer-Imhof

博士, Oestergaard博士, Looman博士の6名体制となった。また, 第11回国際家族看護学会議における日本のリエゾン (Country Liaison) を法橋尚宏博士が担当しており, 感謝状が授与された。

まとめ

IFNAが初めて主催した第11回国際家族看護学会議は, 27ヶ国から参会者が集まり, 国際学会として成功裏のうちに終了した。また, 国際交流委員会主催のツアーは27名が利用し, 日本家族看護学会

会員の国際交流を深化させることができた。日本各地からミネアポリスまでの長旅であったが, 往路, 復路, 会議中に怪我や事故などはなく, 参会者からは「世界の家族看護学研究者との交流ができた」「安心して旅ができた」などの感想をいただいた。特に家族看護学のエキスパートとの懇親晚餐会, オプショナルツアーなど, ツアー利用者への特別サービスは好評であった。なお, 国際交流委員会では, この会議に先立って, 登録する演題の翻訳サービス, IFNAへの登録支援などを実施し, 会員の便宜を図った。